

短 信

14 版を重ねた APhA 刊「非処方せん薬ハンドブック」

薬学教育 6 年制実施とも関連しますが、薬科大学での正規のきちんとした一般用医薬品についての教育が求められています。

この分野での世界的に定評のある書籍（テキストブック）に、米国薬剤師会（APhA）が発行している「非処方せん薬ハンドブック」（Handbook of Nonprescription Drugs）があります。

筆者の手許にあるのは 12 版（2000 年，1088 ページ）ですが、アマゾン・ジャパンで調べると、その後 13 版（2002 年，1100 ページ），14 版（2004 年，1400 ページ）が刊行されています。

http://www.amazon.co.jp/exec/obidos/tg/detail/-english-books/1582120501/contents/ref=cm_toc_more/250-4465605-8741853

1967 年に初版が発行され、以来製薬企業や連邦政府の援助なしに、米国薬剤師会が独自に発行、アップデートを重ねています。「ヘルスケアにおける薬剤師の役割」の章に始まり、OTC の各論に至るまで、エビデンスに基づいた記載がめざされています。著者たちに対する謝辞では、「多くの人々の結び合わさった努力が、このハンドブックを、セルフケアと処方せんのいらない製品についての、世界的規模でのスタンダード、教材としてその地位を維持させている」と、述べられています。

次々と改訂版が出版されていることから伺えるように、この書籍は米国の薬剤師に広く読まれているのですが、米国では OTC 薬販売は完全に自由化されてしまっていますので、こんなカチッとした分厚い書籍が米国の薬剤師に多く読まれていることが、筆者の中でもうひとつしっくりと行ってなく、疑問となっていました。

最近、厚労省の医薬品販売制度改正検討部会で米国の OTC 薬販売事情が話されるのを聞いて、この疑問が氷解するよう感じました。米国では、英語を読むことや話すことのできない店員が OTC 薬を販売しているのですが、例え読めたり話せたりしても、「薬剤師」以外は医薬品の説明などをしてはならないと、法律で定められているとのことでした。

そうした中で、米国の薬剤師はこの「非処方せん薬ハンドブック」で勉強して、薬剤師としての職能を発揮できるよう、健気に努めている、そのような事情があるように思われました。

（2005. 7. 10 / 寺岡章雄）